

入院中の子どもたちに楽しい遊びを届ける



坂上 和子さん

「遊ばー。どのおもちゃがいーい。」。病室のドアを開けると、待っていました。はからした男の子が喜んでさっそん音の作るおもちゃをたたき始めました。ベッドで一人、ビデオを見ていた女の子も「パズルするー」と起き上がりました。

白血病などの難病で長期に入院する子どもたちを遊びを届けるボランティアを始めて十五年になります。

「子育て支援が叫ばれているけど、病院の中は忘れられている。海外では、入院中の子どもだからといって、社会が支援するのは」

本職は保育士。始まりは、友人から小児がんの子どもを見舞ってほしいと頼まれたこと。見ず知らずの重病の子どもをなぜ自分が？ 気が重く、ためらいながら訪ねた病室には、誰かに会いたいと待ちかねた

国立国際医療センター遊びのボランティア ガラガラドン代表。52歳

男の子と、カンパラーメンを食べながら付き添う母親がいました。また一歳の子どもを病室に残してはトイレにも行けず、子どもに泣きつかれて疲弊しきった母親が「こころを届けられる優しさはないのか」。以来、病室にお弁当を運び、少しの間、母親が雑事をできるよう子どもとの遊び相手をするようにになりました。今は、学生や主婦など約五十人のメンバーと活動します。

「病院では、今も子どもたちが泣いている。こんな状態がいつまで放置されるんだらうって、涙を流すのも感じるの」といいます。「でも、全国に根をはるまで、がんばろうと思っます。」になった子どもたちから大事なメッセージを託されていますから「見舞い客で終わらなかつた人です。」

文・写真 江刺 尚子